離さない　　川上弘美

教材のねらい

1　選定の理由

この作品は、『神様』に収録された短編九編のうちの一作品である。『神様』は表題作の「神様」も含め、人間以外の異世界、異種との交流を描いた作品となっており、「離さない」では人間以外のものとして「人魚」が登場する。

主人公の「わたし」の上の階に住む「エノモトさん」が、旅先で人魚を拾う。エノモトさんの生活は次第に人魚に侵食されていき、「このままでは自分はだめになってしまう」と言って、「わたし」に人魚を預ける。「わたし」は人魚に魅了され、人魚を預かってたったの一週間で日常を失い、「これではいけないとぜんぜん思わなく」なったところで「エノモトさん」が現れる。人魚を海に帰しに行った二人は、人魚をなかなか離せないのだが、人魚を海に投げ入れ、「やっぱり離れられない」と思ったところで人魚から「離さない」と言われる。この言葉により、執着する、されるの立場が逆転し、「わたし」は恐怖を感じて逃げ出す。

何かに魅了され、執着することは、日常生活に多かれ少なかれ影響を与える。本作品は短い淡々とした言葉で、「わたし」が人魚に魅せられていく様子や日常生活が失われていく様子が描かれている。その様子は、読み手にとっても何かしら思い当たることがあるだろう。自分にとっての「人魚」はなにか考えてみることで、作品に現れるテーマや象徴について学ぶことができるよい作品である。

2　指導のねらい

作品に現れている比喩表現や、作品に何度も取り上げられている「モノ」が果たす役割を考えることで、比喩や象徴を学ばせたい。さらに、小説のテーマを考えることにより、ただ読むだけに留まらず、読みを現代社会の問題について広げる活動につなげたい。

また、言葉の使い方や漢字ひとつをとってもニュアンスが変わり、作品の中に散りばめられているしかけを読み取ることで、小説のおもしろさを実感してほしい。

(1) 人魚が「モノ」として捉えられている表現と、そうでない表現を探し、その効果について理解する。

(2) 作品の中で何度も取り上げられている「モノ」が果たす役割を考えることで、比喩や象徴について学ぶ。

(3) 「エノモトさん」と「わたし」が人魚を預かってから、日常がどのように変化したかをまとめ、人が何かに執着するとはどういうことか読み取り、自分の体験や生活に結びつける。

3　評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで作品に表れているものの見方・感じ方・考え方をつかみ、現代の社会・文化について批評する能力を身につけようとし、学習課題に沿って、伝説・小説や図像を調べることを通して、比喩や象徴の意味を考えようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕